

待降節第1主日礼拝説教「目覚まし時計は不要です」

日本基督教団石神井教会 2017年12月3日

【使徒書日課】テサロニケの信徒への手紙一 5章1～11節

¹兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。²盗人が夜やって来るように、主の日は来るということを、あなたがた自身よく知っているからです。³人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。⁴ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。⁵しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にはいるのではありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。⁶あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。⁷従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。⁸眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。⁹しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう。¹⁰神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずかせるように定められたのです。¹¹主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きようになるためです。¹²ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。

【福音書日課】マルコによる福音書 13章21～37節

²¹「そのとき、『見よ、ここにメシアがいる』『見よ、あそこだ』と言う者がいても、信じてはならない。²²偽メシアや偽預言者が現れて、しるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちを惑わそうとするからである。²³だから、あなたがたは気をつけていなさい。一切の事を前もって言うておく。」

²⁴「それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、²⁵星は空から落ち、天体は揺り動かされる。²⁶そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。²⁷そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」

²⁸「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。²⁹それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。³⁰はっきり言うておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。³¹天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

³²「その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。³³気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。³⁴それは、ちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましてるようにと、言いつけておくようなものだ。³⁵だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴くころか、明け方か、あなたがたには分からないからである。³⁶主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけたかもしれない。³⁷あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」

「その日」を待つ営み

待降節(アドヴェント)を迎えました。アドヴェントのロウソクが灯りました。御子キリストのご降誕を祝うクリスマスを迎える前の祈りのとき、幼子イエスをお迎えする心備えのときです。

教会学校の子どもたちとは、今日から、クリスマスの祝いのための準備を始めました。中でも、祝いの礼拝として皆で取り組む降誕劇(ページェント)は、準備が必要なものです。ただ、教会学校に来る子どもたちは、年々、限られるようになっていきます。その中で、喜んで降誕劇に取り組んでくれる子どもがどれだけいるか、心配もしているのです。降誕劇そのものは、セリフを覚えて演じたりするのではなく、聖書朗読と讃美の歌で進行するようにいたしましたから、たとえ登場人物の役を演じる者がいなくても、どうにかなるでしょう。あらかじめ練習をしていなくても、降誕劇のストーリーを知っていれば、当日の参加で十分なのです。そのようにしてでも、子どもたちには、毎年と同じように、降誕劇を経験してほしいのです。あのクリスマスの物語を、しっかりと心に刻んでもらいたいのです。そして、幼子イエスを迎えることを、御子キリストを自分の内にお迎えすることを、知るようになってもらいたいのです。

そこで、皆さんにお願いしたいと思います。子どもたちのために、子どもたちと共に、クリスマスを祝う降誕劇に加わっていただけませんか。子どもたちと一緒に、降誕劇の礼拝に、幼子イエスを迎える聖書の中の一人として、参与していただきたいのです。

子どもたちにとって、クリスマスは、今でも魅力的なときなのだろうか、考えることがあります。かつて幼かったころ、クリスマスの日を迎えることが、どれほど待ち遠しかったか。いいえ、むしろ、すべてを受け身で迎えるしかなかった幼かった日々以上に、その日に備えて教会の人々と共に準備を重ねて過ごすことが許されるようになってからのほうが、クリスマスの日を迎えることが待ち遠しくなっていたかもしれません。本当は、クリスマスに備える営みに加えてもらえるときを迎えることが、待ち遠しかったのかもしれません。

母教会では、今でもおこなっているようですが、クリスマス当日までの一週間連続の早天祈祷会をしていました。一年で一番日の短い季節に、夜明け前の教会堂に集まるのです。わたしが十代の頃は、中学生になると皆こぞって、その早天祈祷会に出席していました。多いときには30人も集まる祈祷会でしたが、そのうちの半数が中高生ということもありました。そのときばかりは、寝坊もせずに、まだ真っ暗なうちに起き上がって、煌々と星のきらめく夜空のもと、教会に向かいました。まだ、祈りの何たるかもわからないような子どもでしたので、おとなたちに混じって拙い祈りの言葉を口にするばかりでしたが、いつしか、先輩たちの祈りの言葉を真似て祈るようになっていました。

クリスマスに備えること。御子キリストをお迎えする備えをすること。わたしたちは、今年の備えを始めました。子どもたちのために、また、まだ御子をお迎えしていない人たちのためにも、この備えの日々を、大切にしたいのです。

目を覚まして

二千年の歴史を重ねてきた教会の先達が、待降節の初めに、「主の日の訪れ」に備えて「目を覚ましていなさい」という御言葉に耳を傾けるように、教えてくれています。使徒書日課・テサロニケの信徒への手紙一を記した使徒パウロも、福音書日課・マルコ福音書に伝えられる主イエスも、繰り返して、「目を覚ましていなさい」と告げています。

もちろん、主イエスが弟子たちに告げられたことが、始まりでしょう。もしかすると、主イエスが教えを語られているときにも、あるいは祈られているときにも、弟子たちの中に居眠りばかりする者がいたのかもしれませんが。実際、福音書には、そのような弟子の姿が伝えられています。あの一番弟子のペトロも、また側近のヤコブやヨハネも、主イエスが祈られている脇で、「目を覚ましていなさい」と言われていたのに、居眠りをしてしまったことがあったのです。主イエスの教えや祈りに間近で接することができた弟子たちなのに、その有難みがわからなかったのでしょうか。それとも、主イエスとは言え、ときに退屈な教えを語られたり、眠気を誘うような祈りをなされた、ということでしょうか。

そういうことであれば、使徒パウロのほうが、居眠りを催させる教師だったことは間違いありません。使徒言行録には、あるとき、教会の人々に教えを語ったパウロの話しが延々と夜中まで続いたために、睡魔に耐えられなくなったエウティコという名の青年が、座っていた窓縁から真っ逆さまに落ちてしまったという出来事が伝えられています（使 20:7 以下）。

主イエスもパウロも、教えを聞く者が居眠りをしてしまうようなことを咎めて、「目を覚ましていなさい」と叱責しているわけではないでしょう。主イエスが教え、パウロも教えているのは、「主の日の訪れ」という使信に対して「目覚めていること」です。「主の来臨」を「知っていること」です。

わたしたちの日常生活は、その意味で、いつも「目を覚ましている」とは言えない中にあると思います。主イエスの近くにいますことを必要としない日常生活です。わたしたちの社会は、「神抜き」でも成り立つように作られてきたものだからです。本当に「神抜き」で成り立っているかどうかはともかく、そうしようと、だれもがしてきたのです。キリスト者を自認する者でも、わたしたちの生活の中で「主」や「神」、「キリスト」をお迎えするのは、朝夕や食前に大急ぎでなされる短い祈りのときぐらいだというのが、実状ではないでしょうか。

それどころか、わたしたちは、教会の営みに加わっているときでさえ、「主の訪れ」をしっかり意識し、わきまえているとは言えないかもしれません。神の御心を尋ねることよりも、わたしたち自身の思いや考えを積み上げることに、教会の営みでも偏ることがあるのです。礼拝さえ、そういう危険にさらされていると、わたしは思います。

「目を覚ましていなさい」。それは、「主の日の訪れ」に対する目覚めです。「主の来臨」を心に留め続けることです。「主のご臨在」を意識すること。そのような目覚めを、わたしたちは、待降節にあらためて問われているのです。

すべての人が呼び集められて

主である方、御父なる神、御子キリスト。わたしたちは、さまざまな呼び方をします。聖書そのものが、さまざまな呼び方をしているからです。わたしたちの一切を越えたお方ですから、わたしたちの限られた言葉一つでは、どのようにお呼びすべきかも定まらないのです。

そのようなお方が、おいでくださる。その日が訪れる。いや、すでに目の前に迫っている。戸口の向こうには、すでにおいでになられている。そのお方に、あなたがたも、気づいてほしい。そのお方の気配を感じ取ってほしい。そのお方の、息遣い、ひそやかな御声の響きを聞き取ってほしい。主イエスは、世の雑音に惑わされてばかりの弟子たちに対して、そう願われて、この教えをお語りになられたのだと思います。パウロもまた、同じ願いをもって、テサロニケの教会の人々に、教えを記したのだと思います。

たしかに、地上の営みの中にいる限り、わたしたちは、主のお姿をはっきりと見ることは難しいのです。この世の事柄に目を奪われてしまっているからです。主の訪れの足音を聞き取るのも、難しいのです。この世の雑踏にまみれているからです。けれども、主の御声を聞き取るのは、決して難しくないと、主イエスはお教えになりました。「聖書」の御言葉を聞くことができるからです。パウロも、同じように言いました。「主イエスの教え」を受け取ることができるからです。聖書の御言葉のうちに、わたしたちは、主の御声を聞き取ることができる。

それこそ、わたしたちにとって、もっとも確かな、主の訪れのしるし。主が、わたしたちの間近においでくださっていることのしるし。そう証する先達の後ろ姿を、わたしたちは追って来たのではなかったでしょうか。

先週、一人の姉妹の葬送の式を執り行いました。先主日の正午過ぎに、病院で息を引き取られたのです。まだ働き盛りの年齢でした。つい二週前まで、ここで共に礼拝にあずかっていた姉妹です。その姉妹が、病と向き合う中で、最期の日々を教会の営みの中で歩まれたのです。最後の数カ月、どれほど御言葉を慕い求めつつ歩まれていらしたか。御言葉に触れることを通して、どれほど神と近くいらしたか。最後に入院される直前、わたしたちは皆、姉妹の生き生きとした姿、「元気」と言ってもよいような姿を見ていたのです。その日々は、ご自身の「そのとき」に備えるものだったかもしれません。それはまた、「主と親しく相まみえるとき」を確信する姿だったのではないのでしょうか。

アドヴェントのロウソクに導かれて、二千年前にダビデの町でお生まれになられた幼子イエスの物語を語り、祝うクリスマスを迎えます。この営みの中で、わたしたちは、主の訪れを心に刻むのです。主がおいでくださっていることを、思い起こすのです。主が、わたしたちと親しく相まみえてくださろうとしていることを、確かめるのです。わたしたちだけでなく、まだそのことを知らない者にも、そのことに目覚めていない者にも、クリスマスは訪れます。主はおいでくださいます。「目覚めていなさい」。この呼びかけのうちに、わたしたちは、主の訪れてくださるところへと、共に導かれていくのです。